石橋中学校区

石橋中学校区

【目指す子ども像】
地域とつながり社会に貢献できる子ども
【実践研究課題】「心の教育」
教育活動全体を通じて、居がいのある学級・学校づくりを推進し、児童生徒の自己肯定感を高め、豊かな情操と道徳性を備えた社会に進んでよい行いができる子どもの育成

各部会の取組

【学習指導部会】

【児童生徒の実態】
・小学校…明るく素直な児童が多い。学習に対する主体性や論理的に考えることなどに課題がある。
・中学校…礼儀正しく素朴な生徒が多い。自己肯定感が低く、話合い活動や自分の考えを表現すること、論理的に深く思考することなどに課題を抱えている。

【部会のねらい】
・教師の授業力を高め、児童生徒が主体的に考え、学び合い、達成感を味わうことができる授業づくりを行う。

視点	＜A＞ 教育課程の 工夫改善	＜B＞ 教育活動の 連続性の確保	＜C＞ 教職員間の 連続・協働	＜D＞ 家庭・地域との 連携・協力

取組	・児童生徒にとって居がいのある学級・学校づくりを推進するとともに、教材研究や改善を図りながら授業力向上を図る。 ・児童生徒が主体的に学び、達成感を味わうことができるよう、論理的思考を伴う問題解決的な学習を取り入れた授業を行う。 ・重点教科を算数・数学とし、論理的思考力を高めるための指導を各教科と連携して行う。 ・昨年度実施した取組の継続と日常化を図る。【パワーアップノートの活用、家庭学習強調週間の実施、調査結果などを活用した学業指導、学力向上推進リーダーとの連携強化（小学4校）】
成果	・「学級力アンケート」などの結果も参考にしながら児童生徒の自己肯定感を高める視点に立った指導をすることができた。また、単元計画や授業展開、学習形態などを工夫することによって、児童生徒の論理的思考力を高めることを意識した授業を行うことができた。 ・小学校においては学力向上推進リーダーとの連携が進み、教師のよりよい授業づくりへの理解が深まった。 ・昨年度に行った取組を継続、改善することができた。
課題	・学力向上推進研修や公開授業等での学びを通常の授業に反映させていくことや、各小学校の算数指導の優れた点を各校で共有すること、他教科と関連付けながら論理的思考力の育成を図ることが必要である。 ・これまでの取組を継続しながらも改善していきたい。特に、児童生徒の家庭学習への意欲を高めるため、主体的に取り組めるような工夫が必要である。

【道徳推進部会】

【児童生徒の実態】
・素直で穏やかな児童生徒であるが、発信が苦手だったり、遠慮がちだったりすることも多い。
・道徳の授業では、低学年のうちは活発に発言するが、学年が上がるにつれて発言は減る傾向にある。
・高学年・中学生になると自己表現を好まない様子が見られるようになり、他者の意見を受け入れることに抵抗を感じる児童生徒も増える。
【部会のねらい】
・地域への愛着をもち、社会に貢献できる。
・自己開示をしながら自分を見つめ、考えを表現（話す・書く）することができる。

視点	＜A＞ 教育課程の 工夫改善	＜B＞ 教育活動の 連続性の確保	＜C＞ 教職員間の 連続・協働	＜D＞ 家庭・地域との 連携・協力

取組	・自己開示のしやすい道徳の授業計画、発問や学習形態の工夫などの情報を学校間で交換し、共有化を図る。 ・ワークシートやノートの工夫に重点的に取り組む。
成果	・各校での実践を中心として取り組んだ。 ・ワークシートやノートの工夫を中心として、焦点化して取り組んだ。 ・授業に活用できるよう、各校で使っているワークシート等を共有することができた。
課題	・今年度は部会で集まらなかったので、学校間の情報交換が難しかった。 ・学習形態や発問の工夫などについて、各校の取組の情報交換をして、授業に生かせるとよかった。

【健康増進部会】

【児童生徒の実態】
・臨時休業に伴い、メディア機器を長時間使用していることが予想される。
・ゲーム等のメディア機器を長時間使用することで、生活習慣が乱れる傾向がある。
・ゲーム依存による不登校児童生徒もいる。

【部会のねらい】
・メディアをコントロールすることにより生活習慣を見直し、心の安定を図る。
・メディアを通さずに豊かな人間関係を築き、自己肯定感の向上を図る。

視点	＜A＞ 教育課程の 工夫改善	＜B＞ 教育活動の 連続性の確保	＜C＞ 教職員間の 連続・協働	＜D＞ 家庭・地域との 連携・協力

取組	・中学校の定期テスト期間に合わせたメディアコントロールウィークの実施。 ・保健だより、学校だより、ホームページ等で啓発を行い、校内、家庭、地域との連携を図る。
成果	・メディアコントロールウィークを行ったことで、家庭でのメディア使用のルールの見直しが図れたり、家庭学習の時間や家族団欒の時間を確保することができた。 ・ほけんだよりを活用し、メディアの使用方法や心身に与える影響等について啓発をすることができた。
課題	・アンケートが実施できず、昨年度からの変容を見ることができなかった。 ・ワークシートを活用し各学校ごとの実態把握ができたが、中学校区としての傾向を把握し、指導に生かすことができなかった。

【体力増進部会】

【児童生徒の実態】
・新体力テストの結果において、全国平均を下回る傾向にある。（柔軟性・走力）
・運動する、しない児童生徒の二極化が顕著である。

【部会のねらい】
・運動習慣や技能・体力の二極化に対応し、苦手な児童生徒にも、「運動が楽しい」、「運動がしたい」という関心・意欲を育てる。
・運動に親しむ習慣を身に付ける。（外遊び、教科体育、業間運動や遊具の工夫）

視点	＜A＞ 教育課程の 工夫改善	＜B＞ 教育活動の 連続性の確保	＜C＞ 教職員間の 連続・協働	＜D＞ 家庭・地域との 連携・協力

取組	・教科体育や業間活動を工夫し、運動したいという意欲を高めながら、児童生徒の体力（特に柔軟性・走力）の向上を図るために、年間を通した運動を取り入れたり、準備運動やサーキットトレーニングの工夫をしたりする。 ・児童生徒が外遊びできる機会を増やしたり、児童生徒が外遊びしたくなるように呼び掛けたりして運動に親しむ習慣を身に付けさせる。
成果	・運動を習慣化するために、業間や休み時間に全校ケイドロ大会や体育用具等を自由に使用できるようにしたことで、運動に親しむ機会が増えた学校もある。 ・秋に2回目の体力テストを行った学校もある。春と比較しながら、意欲的に取り組んでいた。 ・担任が呼び掛けたり、一緒に遊んだりしたことで、外遊びする児童が増えてきた。
課題	・依然として運動習慣や技能・体力の二極化が見られるので、引き続き運動時間の確保や運動が苦手な児童生徒へのアプローチを工夫していきたい。 ・走力については運動する機会を設けたが、改善が必要である。

【食育部会】

【児童生徒の実態】
・市の課題である朝食摂取状況について、「毎日食べる」割合は小学校86. 8%、中学校83.5%であり、前年度より改善傾向にある。（令和2年10月調査）
・朝食内容については以前として主食のみなどの課題がある。

【部会のねらい】
・朝食の摂取率向上及び内容の改善に向けた取組により、成長期の自分の体と未来の自分を大切にする心を養う。

視点	＜A＞ 教育課程の 工夫改善	＜B＞ 教育活動の 連続性の確保	＜C＞ 教職員間の 連続・協働	＜D＞ 家庭・地域との 連携・協力

取組	・小学校全校（4年生または5年生を想定）で、学級活動における朝食指導を実施する。 ・現在、中学校1年生に行っている指導内容の見直しを行う。 ・給食週間に、全校で「朝食の大切さ」についての食育指導を行う。
成果	・小学校全校及び中学校で、学級活動における朝食指導を担任と連携し実施した。 ・給食週間中、全校で発達段階に応じた朝食指導を行い、その内容を家庭に啓発した。 ・朝食アンケートにおいて、石橋中学校区全体として、朝食喫食率、朝食内容に改善がみられた。
課題	・小学校4年生（または5年生）、中学校1年生で行っている学級活動での朝食指導を、他学年でも継続できるよう検討する。 ・感染症による授業内容の変更に伴い、家庭への課題が増えた。また、生活の乱れがみられる家庭があるので、家庭への啓発、連携方法を検討する。

【児童・生徒指導部会】

【児童生徒の実態】
・臨時休業により挨拶の機会が減少したことで、挨拶の声が小さくなりがちである。また、生活のリズムの乱れも見られる。
・不登校への対応が喫緊の課題である。

【部会のねらい】
　時と場に応じた、自発的に挨拶する態度を養う。
（各校の課題について情報を共有し、小中連携して解決策を検討する。）

視点	＜A＞ 教育課程の 工夫改善	＜B＞ 教育活動の 連続性の確保	＜C＞ 教職員間の 連続・協働	＜D＞ 家庭・地域との 連携・協力

取組	・「あいさつ運動」「あいさつ強調週間」の実施 ・児童会・生徒会活動との連携を図り、児童・生徒主体の活動を行う。 （・各校の課題について情報を共有し、小中連携して解決策を検討する。）
成果	・児童会・生徒会活動において、各校に応じたあいさつ運動が継続して実施できた。 ・あいさつ運動の継続の結果、「学級力アンケート」や学校評価等の評価も上がり、自主的にあいさつできる児童も増えた。 ・長期休業中等の「家庭でのあいさつ」チェックを行うことで、家庭への啓発を行うことができた。
課題	・さらに習慣化を目指していく上で、児童生徒が挨拶の意義を理解し、進んで挨拶をしようとする意識を高められるような指導の工夫が必要がある。 ・校内に限らず、地域や家庭における挨拶への意識が高まるよう、積極的な指導が必要である。 ・不登校傾向の生徒が増加しており、小中一貫教育の研修時に、小中間の情報交換や、対策の検討を実施していく必要がある。

【特別活動部会】

【児童生徒の実態】
・「学級力アンケート」の結果により、70％以上もの児童生徒が認め合い、感謝のできる学級であると回答している。残りの30％の児童生徒が他者の関わりから見えてくる分野で肯定的な回答ができるように交流活動を計画（一人一人に役割を与えるなど）、実施していく必要がある。

【部会のねらい】
・児童生徒自らの手でよりよい学級づくりを目指していく中で、小中での交流活動を通して児童生徒の思いやりの心やコミュニケーション能力を育み、自己肯定感を高めていく。（交流活動を有効的に用いる）

視点	＜A＞ 教育課程の 工夫改善	＜B＞ 教育活動の 連続性の確保	＜C＞ 教職員間の 連続・協働	＜D＞ 家庭・地域との 連携・協力

取組	・「学級力アンケート」の実施（年3回を予定） ・「学級力アンケート」の結果をもとにした話合い活動（学級活動）と取組 ・振り返りシートの活用
成果	・「学級力アンケート」の活用方法を統一して取り組んだ。 ・振り返りシートから90％以上の児童生徒が学級について自分のこととしてとらえ、よりよくしていきたいと考えていることが分かった。 ・アンケートを繰り返し実践していく中で、話合いの内容が深まっていく学校・学級があった。
課題	・各学級の取組について、学年やブロックで共有するなど広げていく必要がある。 ・アンケートの内容について「石中学区バージョン」として見直していく。 ・子ども未来プロジェクトの内容も踏まえて取組を考える必要がある。

【特別支援・教育相談部会】

【児童生徒の実態】
・学校生活・集団生活に適応して生活できている児童生徒が多い。
・不登校、不登校気味の児童生徒や特別な支援を要する児童生徒が年々増加している。

【部会のねらい】
・自立活動の充実を推進し、児童生徒の自己肯定感を高め、居がいのある学級・学校づくりを推進する。（B）
・教育相談だより等を共有し、各校の教職員や保護者への啓発活動等の実践に生かす。（C）

視点	＜A＞ 教育課程の 工夫改善	＜B＞ 教育活動の 連続性の確保	＜C＞ 教職員間の 連続・協働	＜D＞ 家庭・地域との 連携・協力

取組	・特別支援学級における自立活動の指導目標・指導内容設定シートを活用した授業を実践し、他校の授業参観を実施する。（B） ・教育相談だより等を各校で共有する。（C） ・個人が特定されない配慮をした上で、不登校の実態把握と情報交換を行う。（C）
成果	・自立活動の充実を図ることで、児童生徒の自己肯定感を高めることができた。 ・特別支援学級における自立活動の時間を帯状にとることで、毎日繰り返して、ルールやマナーについての共通理解を、児童と教職員共に行うことができ、定着が図れた部分が大いにあったと思われる。 ・学習ではなく、将来にわたって必要なことについて身に付けさせることができた。 ・「教育相談だより」を紹介し合い、学校間で共有を図ることができた。 ・「教育相談だより」を毎月1回発行したり、保護者版と教師版2種類のたよりを発行したりするなど、各校で工夫して実施することができた。 ・校内委員会を随時開催したことで、校内で不登校の実態把握と情報交換ができた。 ・児童指導主任・養護教諭・関係職員等、チームでの対応によって、不登校及び登校渋りの児童など気になる児童の様子について情報交換をしたり、対応したりすることで、不登校傾向が改善しつつある児童が増えた。 ・SCやサポートセンター、医療機関等、外部機関と連携することにより、一歩進んだ対応をすることができた。
課題	・自立活動の指導目標・指導内容設定シートを活用した授業の実践や、他校の授業参観をの実施することが難しかったため、取組についての工夫や改善が必要である。 ・自立のためのスキルなどを身に付けるためには幼少期からの積み上げと家庭との連携が不可欠である。 ・「教育相談だより」を学校間で共有しやすいようWinbirdを活用したい。 ・「教育相談だより」に関する研修が実施できるとよい。 ・学校間での不登校の実態把握と情報交換が難しかった。今後はリモートでの研修を検討したい。 ・小学校の情報を適切に中学校に引き継ぎ、適宜、情報交換ができるよう小中間の連携を図っていくことが必要である。連携を強化することで、不登校への初期対応につなげたい。

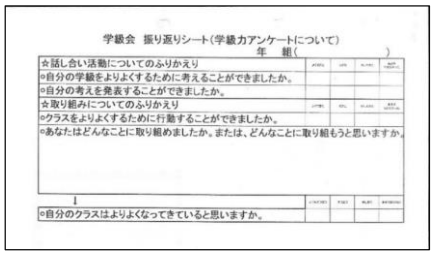
成果

・各部会において、児童生徒の実態を捉えた上で、実践研究課題を受けた部会のねらいから、具体的な取組を実践することができた。
・臨時休業期間もあったが、各校において、実態に応じた取組が実践できた。
・特別活動部会を2回開催し、「学級力アンケート」の実施や結果の扱いについて各校で共通して取り組むことができた。
・「学級力アンケート」、話合い活動、「振り返りシート」の実施から、児童生徒の意欲面を把握することができた。

課題

・各部会の部員が集まっての開催ができず、Winbirdでのやり取りが中心になり、各校の取組が共有されにくかった。来年度は会場を分散して部会を開催し、各校の取組の共有ができるとよい。（ZOOM等ICTの活用を検討する）
・「学級活動振り返りシート」の指標を再検討することで、児童生徒の実態把握に努めたい。
・特別活動部会に小中学校の未来プロジェクトの担当を入れることで、取組を一体化したい。

学級会　振り返りシート



学級会　振り返りシート（学級力アンケートについて）

年　組（　　）

☆話し合い活動についてのふりかえり				
○自分の学級をよりよくするために考えることができましたか。				
○自分の考えを発表することができましたか。				
☆取り組みについてのふりかえり				
○クラスをよりよくするために行動することができましたか。				
○あなたはどんなことに取り組めましたか。または、どんなことに取り組もうと思いますか。				
○自分のクラスはよりよくなってきていると思いますか。				

学級力アンケート　まとめについての共有

学級力アンケートの話し合いについて

石橋中学校区小中一貫教育グランドデザイン

地域とつながり社会に貢献できる子

石橋中学校区実践研究

心の教育

特別活動部会開催